物語文を音読しよう

ー第3学年　感想を大切に「モチモチの木」ー

羽　場　邦　子

1　はじめに

低学年で，さまざまな学習活動を経験して3年生になった子どもたちが教材と向き合うとき，自分ならこんな学習活動をしたいという思いをもっている。4月に担任したとき，子どもたちに「お話を読んでいく時，どんなことをして学習をしたいですか」と問いかけた。さまざまな答えが返ってきた。その主なものを挙げる。

音読したい，視写したい，吹き出しを書きたい，お手紙を書きたい，劇をしたい，紙芝居を作りたい，お話に出てくる人の気持ちを考えたい，等

本校の国語科では，課題解決的な学習を中心に学習を進めてきている。「課題を作る－解決の方法を考える－課題を解決する－まとめる，振り返る」という学習過程の中に子どもたちが願う学習活動を取り入れながら，自分なりに物語文を読むことができるようにしたいと考えた。自分なりに読むためには，自分で考える場，友達の考えを聞いて自分の考えを深め広げる場が必要である。本実践では，音読を中心に物語文を読む学習について検討していきたい。

2　実践事例ー感想を大切に「モチモチの木」ー（第三学年）

(1)　「モチモチの木」を指導するにあたって

①　作品の特色

「モチモチの木」を指導するにあたって，どのような学習活動が適切なのかを検討した。作品の特色として，次の点が挙げられる。

ア　民話風の創作である イ　民話としての語り口調を大切にしているー語り手によって物語が語られているー ウ　作品の主題が主人公や語り手の言葉によって語られている エ　昔の言葉や地方の言葉で書かれている オ　小見だしのついた構成である カ　挿絵が切り絵で鮮やかであること キ　子どもが主人公で，寄り添って読みやすい。

②　子どもが自分なりの読みをするために

自分なりの読みをするためには，一人一人が考えをもつことが必要である。その考えを学級の中で出し合うことにより，さらに読みは深まる。本実践では，作品の特色を踏まえ，書き込みにより自分の考えをもつ場を設定する。また，学習のまとめとして保護者を招待して「音読発表会」を行うことにより，学習への意欲をもつようにしたい。

(2)　単元について

この作品は，豆太がじさまのために一人で夜道を走り，勇気のある子どもしか見ることができないモチモチの木に灯がともる光景を見たという話である。子どもたちは，5歳の豆太に自分の経験

と重ね合わせながら読むであろう。泣き泣きふもとの医者様へ走る豆太の様子や気持ちを読み取ることで，主題となる「人間，やさしさあえあれば，やらなきゃならねえことは，きっとやるもんだ」というじさまの言葉の意味をつかむことができると考える。本単元では，語り手の文末表現や接続語，比喩や擬人法，会話文に着目して，じさまと豆太の様子や気持ちを考え音読を取り入れて学習を進める。学習を進めるにあたって，気づきや感想から共通課題を作る。また，課題に沿って，一人読みでは，どのように音読したいか，登場人物の様子や気持ちはどのようか，などについて書き込みを行う。さらに，書き込みをもとに，学級で話し合ったり音読し合ったりして課題解決を行う。学習のまとめとして，保護者を招待し「音読発表会」を行う。

(3) 指導目標

① 場面の情景，じさまの願いや豆太の気持ちの変化を読み取り，自分なりの感想をもつことができるようにする。

② 感想や感動を音声表現によって確かめることができる。

(4) 指導内容と計画（全14時間）

第一次　全文を読み，課題解決の見通しをもつ。…… 3時間

第二次　場面の情景やじさまの願いと豆太の気持ちの変化を読み取り，音声表現により読み深める。…… 7時間

第三次　「モチモチの木」の音読発表会をする。…… 3時間

第四次　学習のまとめをする。…… 1時間

(5) 学習の概要

①出会う

題名読みの後，全文を読み聞かせ，次の3項目をワークシートに記述した。

ア　「モチモチの木」って何かな

- 豆太がつけた名前で，小屋のすぐ前に立っているでっかい木。
- 秋になると，茶色いぴかぴか光った実をいっぱいふり落とす。
- 朝はやさしく，夜になるとこわくなる木。
- 夜になると灯がともるきれいな木。山の神様のまつり。
- 木うすでついてひいてこなにする。こなにしたやつをもちにこねあげてふかして食べるとほっぺたが落っこちるほどおいしい。
- モチモチの木とちの木はどっちが本当の名前かな。

イ　心にのこったことは

《おくびょう豆太》

♥豆太がしょんべんに行くときじさまをおこすこと。豆太は弱虫だと思った。

♥わたしは，9才なのに夜中にお化けが出ると思ってお母さんを起こすから，豆太の気持ちがよく分かります。

♥豆太のおとうがくまと組みうちして頭をぶっさかれて死んだからかわいそう。

《やい，木い》

♥昼間はいばっている豆太が，夜になるとおくびょうになるから。

《霜月二十日のばん》

♥豆太は弱虫だと思った。

《豆太は見た》

◎「霜が足にかみついた。足からは血が出た。豆太はなきなき走った。いたくて寒くてこわかったからなあ。でも，大すきなじさまの死んじまうほうがもっとこわかったから・・」

豆太は，じさまが好きで大切だから真夜中に一人で医者様をよびにいくゆう気が出たのだと思う。
♥豆太はおくびょうだけど，いざとなるとやくにたつ。
♥モチモチの木に灯がついて雪がふってきれいだった。
《弱虫でも，やさしけりゃ》
♥豆太は弱虫でも，やさしさがあったから，モチモチの木の灯が見えた。
♥豆太は，一度ゆう気が出ても，また，ゆう気がでなくなるなんておもしろい子どもだな。

ウ　どん学習がしたいかな

・豆太みたいに，弱虫でもやさしけりゃの学習がしたい。
・豆太やじさまの気持ちが分かるように音読したい。
・つづき話，絵，ししゃがしたい。

子どもたちが最も印象に残ったのはイの項目《豆太は見た》の場面であった。◎の記述が最も多かった。

②見通す

《共通課題を作る》

全文をを読んだ後のワークシートの記述をプリントして子どもたちに配った。それを読み合った後，自分が作りたい場面を選び課題を作った。さらに作った課題を一覧表にし，それをもとに共通課題を決めていった。

共通課題
《おくびょう豆太》☺おくびょうな豆太の様子や気持ちを考えて音読しよう。
《やい，木い》☺昼間の豆太と夜の豆太の気持ちのちがいを考えて音読しよう。
《霜月二十日のばん》☺あきらめた豆太の気持ちを考えて音読しよう。
《豆太は見た》☺夜道を医者様をよびに行く豆太の様子や気持ちを考え音読しよう。
《弱虫でもやさしけりゃ》☺じさまのよろこぶ気持ちややさしさを考え音読しよう。

《解決の方法を考える》

課題を決めた後，子どもたちに「どんなことに注意して音読すればよいか」と問いかけ，話し合い，次の３点を学習方法としてまとめた。

☆豆太，じさま，医者様の会話文に注意して音読する。
☆語り手の言葉に注意して音読する。
☆豆太のしたことに注意して音読する。

一人学習を行うために，教材文を印刷し「書き込みの本」として，子どもたちに配った。子どもたちは，それぞれ工夫して表紙に絵をかくなど書き込みに対して意欲を見せた。書き込みのポイントとして「どのように音読するのか，なぜそのように音読するのか，気持ちや様子などで思ったこと，吹き出しを書く，――（ダッシュ）の部分を自分で想像して書く」などをの方法を話した。

子どもたちに提示した音読記号例

========	強く	----------	弱く
～	ゆっくり	――――――	はやく
＜	間をあける	≪	もっと間をあける
⌣	文の終わりを上げる	⌢	文の終わりを下げる
～～～～～～～～～～～～	気持ちが分かるように（どんな気持ち）		

－書き込み例－

③解く －《弱虫でもやさしけりゃ》の場面から－

課題 ㊀じさまのよろこぶ気持ちややさしさを考え音読しよう。

学習活動	主な児童の反応	考察
（※ 授業の前に本時の場面を板書しておいた。） 1 学習課題つかむ。 2 学習の見通しをもつ。 （今日は，どんなことに注意して読めばよいかと問いかけた）	C 板書された課題を読む。 C 20名が発言する。発言を次にまとめる。 ・「おまえは山の神様の祭りを見たんだ。モチモチの木には，灯がついたんだ。おまえは，一人で夜道を医者様をよびにいけるほど，勇気のある子どもだったんだからな。」を，感動したように，よくやったな，今度から一人で行け，優しくほめているように読んだらいい。 ・「自分で自分を弱虫だと思うな。」叱ったように読んだらいい。 ・「人間，やさしささえあれば，やらなきゃならねえことは，きっとやるもんだ。」を教えるように読んだらいい。 ・「だ」は力強く読んだらいい。 ・「は，は，は。」は間をあけて読む。 ・「じさまあ。」は，また，元にもどって豆太はおくびょうになったから小さく読むとい	○本文を板書したために，学習活動がスムズになった。 ○子どもたちは，「じさま」「豆太」「語り手」に分けて本時をとらえている。本時の課題，じさまの喜ぶ気持ちや優しさを音読するについては注意したい事の中に十分発言がある。 ○豆太の「じさまあ。」の会話文は，意見が２つに分かれた。これについては，多くの時間を費やすことができなかったが，――の部分を書く活

	う意見とおくびょうではなくなったから元気に読むという意見に分かれた。 ・「と，しょんべんにおこしたとさ。」は元にもどったから，あきれたように読む。	動や振り返りのワークシートに語り手の思いを書くことにより，豆太の気持ちを読むことができたと考える。
3　じさまと豆太の会話文，語り手を工夫して音読する。 ・音読を聞き合い相互評価をする。	C　指名読みと一人一人で読み方を工夫した一人読みを行う。 ・じさまがうれしくてやさしく言っているように読んでよかった。 ・「じさまあ。」がじさまに甘えるように読んで豆太らしいと思った。	○音読の工夫をする時間が十分でなかった。相互評価より，自分が読みたいという気持ちが強いのだと感じた。学習展開の工夫をする必要がある。
4　「人間，優しささえあれば・・・」の意味を考える。	C　指名により発言をする。 ・優しさは思いやり，おくびょうでも思いやりがあったらちゃんとできる。 ・豆太はじさまが大好きだったから走った。	○「――」の記述から子どもたちは「豆太はやっぱり」という思いをもっていることが分かった。
5　「－それでも」の－を書き込みの本に書く。	C　記述後，数名発言した。 ・「また，やっぱり」「やっぱり弱虫か」「前と同じだな」「しかし，でも」等	
6　本時の振り返りをワークシートに書く。	C　次の3項目で振り返りを行った。 ①そのばんから「じさまあ。」としょんべんにじさまを起こした豆太を語り手はどう思っていたでしょう。 ②今日の学習を振り返りましょう。 音読できた，考えた，書いた（3段階の評価による　😊，○，△） ③今日の学習で思ったことを書きましょう。 （自由記述）	○①の記述には「せっかく勇気が出たと思ったのに，すぐ勇気が出なくなってだめなあ。」があった。じさまの気持ちと豆太の気持ちを語り手に語らせていると読んでいると考える。

④まとめる，ふりかえる

単元全体を振り返って，自己評価を行った。

◎みんなで課題を作ったこと
- 課題を作ったら音読しやすかったし，音読の工夫ができた。課題を作ってよかった。
- 課題を作るときにいい案がでなかった。今度はがんばりたい。

◎書き込みをしたこと
- 書き込みをすると音読がどんどんうまくなった。
- 書き込みをしていたら，豆太やじさまの気持ちが自然に出ているみたいでよかった。
- 最初は「うーん」という感じだったけれど，しばらくやっていたら「うん，うん」というように分かった。
- 100こ（150こ）めざしてがんばりたい
- 読んでいるうちに書きこみのこつがつかめて人の発表を聞いて書きこみのヒントになった。

◎音読の学習をしたこと
- 書きこみをするたびに工夫することを考えて（音読が）うまくなったので，また，それを

やってうまくなりたい。
・何度も何度も読んでいるうちにプリントを見ずに言えるようになった。
・音読をすると，じさまや豆太の気持ちを考えることができた。
◎課題を考えるために，自分で注意したいことを見つけたこと
・ちょっとむずかしかった。
・みんなで意見を出し合うと考えやすかった。
・書き込みで注意することを書いてきて発表するのでよいと思った。

子どもたちの記述を読み，次のように学習を振り返りたい。

・課題を「～を考えて音読しよう」としたのは音読がしやすくよかった。しかし，一人一人の気づきを共通課題にする難しさもあった。
・書き込みは，最初，難しさを感じていた者もいたが，音読の工夫がしやすい・気持ちを考えやすいなど一人学習の方法としては有効であったと考える。
・音読は自分でその上達が分かる。暗唱まで至った子どもの姿を考えると有効であったと考える。
・「自分で注意したいこと」を発言するためには，自分なりの読みができているということが前提である。一人一人の読みを確かにするための取り組みを更に続けていきたい。

⑤つくる

ア　ワークシートにより自分の思いを書く。

◎　豆太にお話してあげたいことを書きましょう。
・　モチモチの木は何もしないよ。豆太は本当は心の中にやさしさがあるから医者様をよびに行ったんだね。本当はすっごく勇気があるんだよ。ただみんな勇気を見せないだけでいざとなるとすごく勇気が出るんだよ。豆太は弟よりも勇気があるかもしれないよ。がんばれ。
◎　「モチモチの木」は豆太にとってどんな木かな。
・本当は豆太にとってすっごく大切な大好きな木。
・友達のような木。豆太の好物のざいりょうをくれる木。
・豆太にとっては勇気のしょうめいの木。おばけに見える木。

イ　音読発表会

40人の学級を２つのグループに分けて音読練習をした。練習の過程でペアを作り相互評価も行った。参観日が音読発表会であった。当日，自分のめあての振り返りとペアの人への相互評価を行った。

みんなのお母さんの前でちょっときんちょうしたけれど，まちがえずに読めてよかった。自分でもじさまのかぎがよくなって，声とスピードがいいと思いました。
（さんへ）
前よりも声が大きくて「じさま。」のかぎがよくなっていたと思いました。

3　おわりに

本実践は，音読を学習の中心におき，自分の考えをもつ場として書き込みを取り入れた。子どもの気づきから共通課題を作ったが，その解決方法を一人一人のものにすることが不十分だった。しかし，音読を楽しみにする子どもが多くなった。また，書き込みをどんどん増やしたいと意欲も見せている。「モチモチの木」の学習では，家庭で自分の声をテープに録音して学習したり，「モチモチの木」の場面を詩にしたりする子どもが出てきた。「モチモチの／木のみをまぜた／もち食べたい」そんな子どもたちの姿から，国語は教室だけでの学びではないと感じる。本実践での学びたいという芽を，次の実践へつなげていきたい。